

道成寺

シテ 白拍子

後シテ 蛇体

ワキ 道成寺の住僧

ワキ連 従僧（二人）

ワキ／これは紀州道成寺の住侶じゅうりよにて候。さる子細候ひて此の寺に

撞鐘つきがね久しく退転仕り候を。某それがし再興致して候。今日吉日にて候間。

鐘を鐘楼しゅうろうに上げ。同じく供養を為さばやと存じ候。いかに誰かあ

る。今日鐘の供養にさる子細の候間。女人にょにんを固く禁制きんせいと申し附け候へ。

シテ／作りし罪も消えぬべき。作りし罪も消えぬべき。鐘のお供養

拝まん。これは此の国の傍かたわらに住む白拍子にて候。あたり近き日

高寺に。鐘の供養の由申し候程に。結縁けちえんの為参らばやと思ひ候。

月は程なく入り汐の。煙満ち来る小松原。急ぐしるしかまだ暮れ

ぬ。日高の寺に著きにけり。日高の寺に著きにけり。急ぎ候程

に。日高寺に著きて候。いかに案内申し候。鐘の供養を拜ませて

給はり候へ。これは余の女人かわには異り候べし。これは此の国の傍に

住む白拍子にて候。面白う舞を舞うて見せ候べし平に拜ませて給は

り候へ。（物著）あれにまします宮人の。烏帽子を暫し假に

著て。扇おつ取り色々に。既に拍子を進めけり。花の外には松ばかり。花の外には松ばかり。暮れ初めて鐘や響くらん。(乱拍子)

子)

道成みちなりの卿。承り。始めて伽藍。橘みちなりこうぎょうの。道成興行みちなりこうぎょうの。寺なればと

て。道成どうじょう。寺じとは名づけたりや。

地謡／山寺のや。(急ノ舞)

シテ／春の夕べを。来てみれば。

地謡／入相の鐘に花や散るらん。花や散るらん。花や散るらん。

シテ／さる程にさる程に寺々の鐘。

地謡／月落ち鳥鳴いて霜雪天に。満潮程無く日高の寺の。江村の漁火。愁へに対して人々眠ればよき隙ぞと。立舞ふ様にて狙ひ寄りて。撞かんとせしが。思へば此の鐘怨めしやとて。龍頭に手を掛け飛ぶとぞ見えし。引き被きてぞ失せにける。

ワキ／昔此の国の傍に。まなごの庄司といふ者ありしが。一人の息女を持つ。又奥より熊野詣の先達のありしが。庄司が許を定宿とし年々泊りけるに。いたいけしたる土産などを持ちて来り。庄司娘に与えしかば。庄司娘を寵愛の余りに。やああの客僧こそ。汝が夫よ妻よとざれけるを。稚心に真と思ひ年月を送る。又或時彼の客僧。庄司が許に来りしに。彼の女申すやう。いつまで我をば捨て置き給ふ。今は奥へ連れてお下りあれと申す。客僧大きに騒ぎ。夜に紛れ

逃げ去り此の寺に來り。かやうかやうの子細によりこれまで参りたり。まっぴら助けてくれよと申す。此の寺の老若談合し。およそに匿しては悪しかりなんと思ひ。其時の撞鐘を卸し其の中に匿す。又彼の女は。遁すまじとて追っかけしに。折節日高川の水増さりしかば。上。下へと泳ぎありきしが。一念の毒蛇となつて。日高川を易々と泳ぎ渡り此の寺に來り。ここ。かしこを尋ねありきしが。鐘の下りたるを不審に思ひ。龍頭を銜え七纏まとひ纏ひ。尾にて叩けば。鐘は即ち湯となつて。山伏も即座に失せぬなんぼう。恐ろしき物語にて候。縦ひ如何なる悪靈なりとも。水かへつて日高川原の。まなごの数は尽くるとも。行者の法力尽くべきかと。

ワキ連／皆一同に声を上げ。

ワキ／東方に降三世明王。ごうぜんぜみょうおう

ワキ連／南方に軍荼利夜叉明王。ぐんだりやしやみょうおう

ワキ／西方に大威徳明王。だいたくみょうおう

ワキ連／北方に金剛夜叉明王。こんごうやしやみょうおう

ワキ／中央に大聖不動。だいしょうぶどう

ワキ・ワキ連／動かか動かぬか索の。曩謨三曼陀嚩日羅南。なまくささまんだばさらだ

旋陀摩訶嚩遮那。娑婆多耶吽多羅吒干輪。聴我説者得大智慧。せんだまかろしやな そわたやうんたらたかんまん ちようがせつしやとくだいちえ

知我心者即身成仏と。今の蛇身を祈る上。何の怨か有明の。

ワキ／撞鐘こそ。

地謡／すはすは動くぞ祈れ只。すはすは動くぞ祈れ只。引けや手ん  
手に千手の陀羅尼。不動の慈救の偈。明王の火焰の。黒煙を立てて  
ぞ祈りける。祈り祈られ撞かねど此の鐘響き出で。撞かねどこの鐘  
響き出で。引かねど此の鐘躍るとぞ見えし。程無く鐘楼に引き上げ  
たり。あれ見よ蛇体は。現れたり。　（イノリ）　謹請東方青龍清  
浄謹請西方白龍白王謹請中央黃體黃龍一大三千大千世界の恒沙の龍  
王哀愍納受哀愍じきんの砌なれば。いづくに大蛇はあるべきぞと。  
祈り祈られかっぱと転ぶが又起き上がって忽ちに。鐘に向ってつく  
息は猛火となって其の身を焼く。日高の川波。深淵に飛んでぞ入り  
にける。望足りぬと験者達は我が本坊にぞ帰りける。我が本坊にぞ  
帰りける。